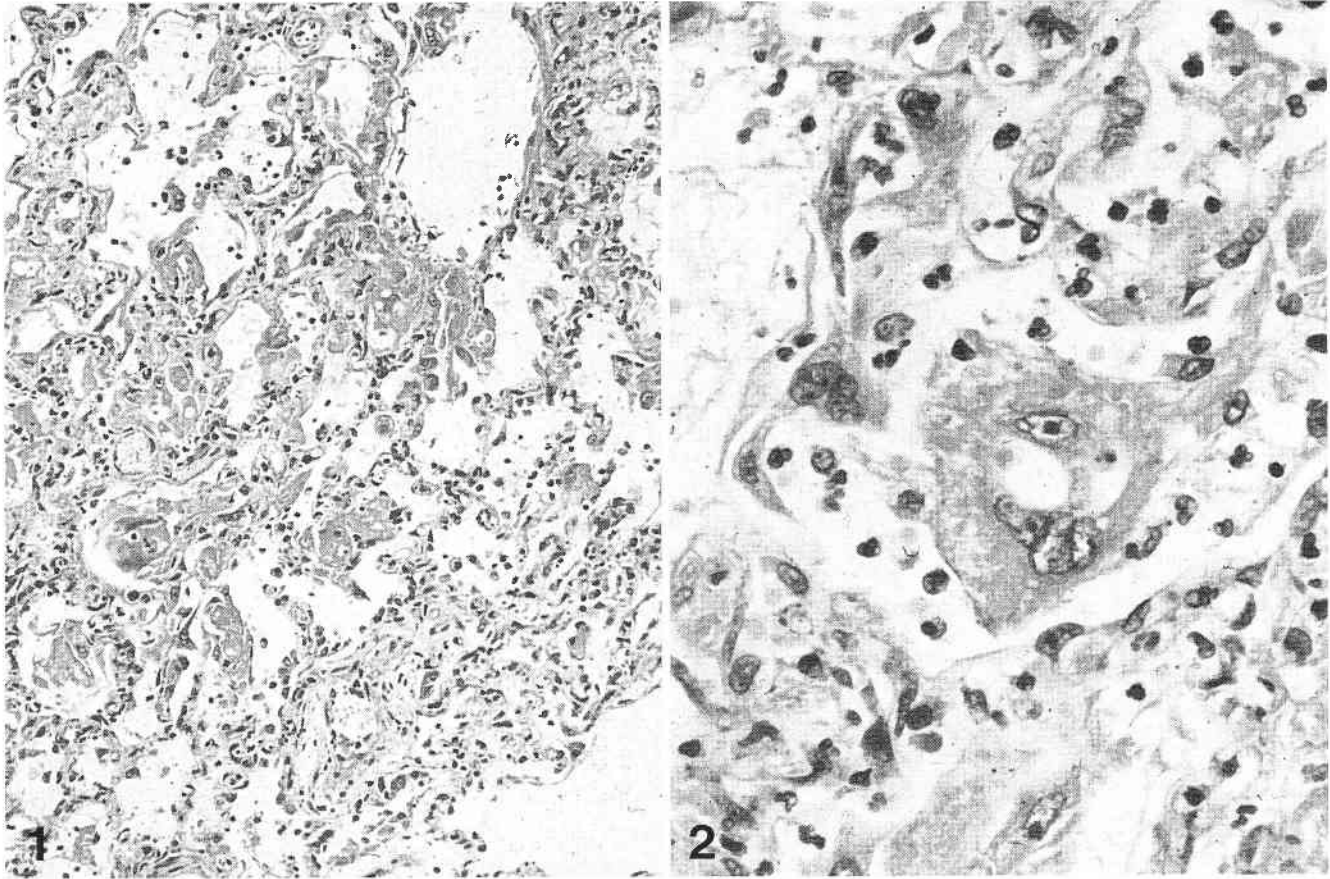


## イヌの肺

日本獣医畜産大学出題 第41回獣医病理学研修会標本 No. 787



動物：イヌ（ヨークシャーテリア），オス，9歳。  
 臨床事項：呼吸困難により，他院から本学畜病院に転院。転院後，患畜は酸素テント内で加療された。X線検査で間質および気管支病変を疑うが，確定できなかった。ステロイド投与で一次的な改善を認めたが，その後症状の悪化と小康状態を繰り返した。IgE検査でアレルギー性肺炎は否定された。転院後，約1ヶ月半で，呼吸困難によって斃死した。  
 肉眼所見：全体に灰赤色を呈し，退縮不良。剖面では径3~5mmで周囲との境界がやや不明瞭な白斑が全ての葉で認められた。  
 病理組織学的所見：肺胞壁はやや肥厚し，軽度の膠原線維増生が認められた。肺胞内には多数の大型細胞が認められ，同細胞にはしばしば強好酸性の物質が付着していた（写真1，100X）。大型細胞には多核細胞も認められ，核は概ね淡明，細胞質は弱から強好酸性を示し，一部は泡沫化していた（写真2，400X）。肺胞内および肺胞壁に単核球系細胞の浸潤が認められた。好酸性物質の大部分はPTAH染色で青染する，フィブリンであった。  
 免疫組織化学的に，大型細胞の多くは抗ケラチン

抗体で陽性，抗ビメンチン抗体に陰性のII型肺胞上皮であり，一部は抗ビメンチン抗体陽性，抗ケラチン抗体で陰性のマクロファージであった。いずれの細胞も抗ジステンパー抗体には陰性だった。

電顕的に大型細胞の表面にマイクロ・ヴィライが，細胞質内に層板構造および腫大したミトコンドリアが多数認められ，II型肺胞上皮の特徴を反映していた。

肺胞壁の肥厚，肺胞でのII型肺胞上皮の出現とフィブリンの析出，炎症細胞浸潤，などの所見から，間質性肺炎を強く疑った。間質性肺炎は薬剤，高酸素，放射線などの原因の特定しうる間質性肺炎に対して，原因不明のものを「特発性」としている。本症例の酸素加療が原因となりうるかどうかが考えたが，本症例は臨床症状を示した期間の，かなり後期に酸素テント加療を始めていた。従って，本症例は一次的要因が明らかでない特発性間質性肺炎であり，酸素テントによる加療が二次的にII型肺胞上皮の活性化を強めたものと考えた。

診断名：大型化したII型肺胞上皮を伴う特発性間質性肺炎